

# 妙見祭の華・笠鉾

—受け継がれてきたまちの宝—





# 受け継がれてき

## ◆笠鉦のはじまり◆

笠鉦が妙見祭に出るようになったのは江戸時代の天和・貞享頃（1681～1687）と言われていま  
す。最初は簡素であったものが次第に豪華なものになっていったようです。

松井家文書には、笠鉦菊慈童の移り変わりが記されています。それによると、  
「宝永年中御家司松井牛右衛門殿、後長慶と云寄進之華蓋長柄傘之如ヶ花を出し、壺人にて荷神輿  
ニ随ヒ参候、今以其通也、其頃宮之町より出し候も同し事にて、大ふりに致傘を緋縮緬にて張、上ニ  
唐団扇、中ニ宮町之文字を居、下ニへうたん有之、ツヒキあげまきを以飾、壺人持也、長慶老寄進之  
品と前後ニ参申候」とあり、右図のように傘の上に飾りのついたものを1人で持っていたのが最初の  
姿のようです。

その後、元文3年(1738)に他の笠鉦のように二重の笠に菊慈童の飾りのついた4人持ちのものに  
なったことがわかっています。

豪華な飾りのついた笠鉦は、いわば“<sup>ふりゅう</sup>風流化されたまちの印”なのです。様々な工芸技術が集約  
された笠鉦はまさに妙見祭の華といえます。



笠鉦菊慈童初期の姿  
(推定図)

## ◆笠鉦の構造◆

笠鉦の外見は建物のようですが、中を見ると笠鉦を支える  
柱は中央の柱1本だけです。

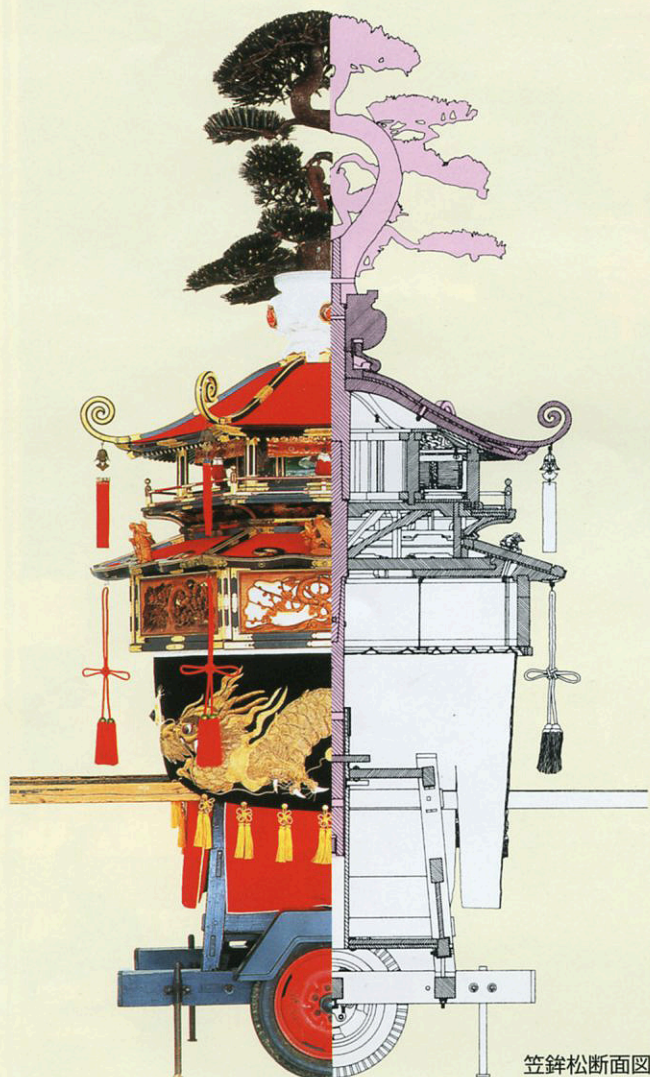
その柱の先端に飾りがつき、その下に上笠があります。欄  
間や水引幕などの部材は、上笠から下がっているのです。上  
の推定図と比較すると、

- ①笠鉦の柱が推定図の人が持っている柄の部分
  - ②松の飾りが傘の上の扇子と瓢箪の部分
  - ③上笠の部分が緋縮緬を張った傘の部分
- にそれぞれ相当し、“傘”自体が大型化して豪華な飾りがつき、  
“笠鉦”になっていったことがよくわかります。

## ◆組立ては無形の文化財◆

笠鉦は祭りの数日前に組み立てられます。笠鉦1基につき  
部品の数は約200～300個あり、普段は種類ごとに箱に入れ  
られて町で保管されています。

それぞれの部品は、順番どおりに組み立てていかないと、  
部品が入らなくなってしまいます。組立ての技術も長年に  
わたって受け継がれてきた貴重な無形の文化財なのです。



笠鉦松断面図

## ●笠鉦は曳くもの？

笠鉦にタイヤがついたのは昭和20～30年代にかけてです。それまでは8人で担いでいま  
した。往復約12kmの道のりを担いでいくのは大変な重労働でした。

笠鉦松にタイヤがついたのは昭和38年(1963)。  
(写真はそれ以前の様子です)

(麦島勝氏撮影)





# たまちの宝、笠鉾

## ◆笠鉾の飾り◆

笠鉾には、謡曲に題材を求めたものや、美しい花や動物などの飾りが多く見られ、どれも不老長寿や商売繁盛への願いがこめられています。



「菊慈童」・人形  
経文の書かれた菊の葉の露を飲んで不老不死の仙人になった少年。



「本蝶蕪」・青貝細工の伊達板 文化7年(1810)制作

青貝細工は、薄く研ぎだした貝の裏から彩色し、型を抜いて漆器に貼り付けていく技法で、長崎青貝細工や長崎漆器ともいわれるように長崎で作られていました。この伊達板は、制作年のわかる青貝細工の作品の中で最古のものとして注目されています。

## ◆笠鉾の記録◆

部材に残る墨書は、笠鉾の修理や改造、関った人たちを教えてくれる貴重な記録です。



「蜜柑」の蛇腹の裏に記された宝暦3年(1753)の改修のときの記録です。どのような人たちが関ったかを知ることができます。



「恵比須」の波の裏には、明和元年(1764)に八代紺屋町の大工、三平次が14歳の時に作ったと記されています。

## ◆甦った部材◆

平成6年から11年に行われた修復作業で、本来の姿を取り戻した部材も多くあります。



「西王母」の獅子

修復前



現れた元の彩色

西王母の獅子の表面の金箔をはがすと元は彩色されていたことがわかりました。



修復後

## ●見ごたえ十分、豪華な水引幕。裏にはこんな秘密が……

金糸で亀が刺繍された豪華な水引幕。これは、約100年前の明治32年(1899)に作られたものです。裏には様々な赤い糸で補修した跡が見え、たくさんの人たちが笠鉾をまちの宝として大切に受け継いできたことがわかります。



水引幕の裏  
赤い糸で、外れてきた表の金糸を幕に縫いとめています。



「蘇鉄」・黒紋縹子地蔵に波瑞亀模様刺繍水引幕





蘇鉄 (二之町)



本蝶蕪 (本町)



菊慈童 (宮之町)



蜜柑 (中嶋町)



猩猩々 (紺屋町)



西王母 (新町)



迦陵頻伽 (塩屋町)



松 (平川原町)



恵比須 (徳湊町)

◆描かれた笠鉦◆ 妙見宮祭礼絵巻 (八代神社所蔵)

この絵巻は、平成20年八代に里帰りしたものです。妙見祭を描いた絵巻は、これまで財団法人松井文庫所蔵の絵巻が2点、八代神社の絵巻が1点確認されていました。その中でも、八代市立博物館の妙見祭人形模型の元となった松井文庫所蔵の青井郷秀が弘化3年(1846)に描いた絵巻が広く知られており、八代神社の彩色されていない絵巻はその下書きではないかと考えられていました。

しかし、この新発見の絵巻こそが八代神社の絵巻を元に制作された絵巻であることがわかり、青井郷秀の絵巻は、それを写して制作したものであることがわかりました。

絵巻の絵師は、松井家のお抱え絵師である甲斐良郷(1761~1829)で、青井郷秀の師にあたります。図中の笠鉦とそれぞれの笠鉦の部品の制作年などから、文化2年(1805)~文化6年(1809)の間に制作されたと考えられます。カメラもビデオもなかった時代、年に1度しか見ることのできない祭礼の様子を精密に描いたこの絵巻の発見により、19世紀初頭の妙見祭の様子が鮮やかに甦ってきました。

(大きさ) 縦49.2cm 長さ約40m